マルクス＝エンゲルス選集

第一卷

フォイエルバッハ　政治的自由主義
眞正社会主義　プロシャ憲法
ドイツの狀態
哲學の貧困

新世界觀の成立
共産主義通信委員会

マルクス=エンゲルス選集

第1巻

新世界観の成立
共産主義通信委員会

マルクス=レーニン主義研究所編

大月書店刊

マルクス＝エンゲルス選集

一九五三年七月十五日　初版発行
一九五四年八月十五日　二版発行

第一巻

定価　四二〇円

編集者　マルクス＝レーニン主義研究所
東京都文京区本郷一丁目一五番地

発行者　小林直衛
東京都文京区柳町二六番地

印刷者　三晃印刷株式会社

発行所　東京都文京区本郷一丁目一五番地
大月書店
電話小石川(92)三〇九一番
七八八七番
振替・東京一六三八七番

三晃印刷・田中製本

凡例

一　原註は（原註1）と、異文考証等についての編集者（訳者）による註は＊印で標示し、その註釈文はそれぞれ註を必要とする個所の直後に、訳者による註は（1）（2）等と標示し、その註釈文は（註1）（註2）等として各論文、手紙の末尾に一括し、なお簡単な訳註は〔……〕として六号活字で本文中に挿入した。原文にある挿入句は（……）で挿入した。

二　原文で一般的に使用されている國語以外の原語は、原則としてその訳語の直後に（……）で挿入した。

三　引用文は「……」で、引用文中の再引用個所は『……』でしめした。

四　著書、新聞、雑誌その他の出版物の書誌名または著作題名等は『……』でしめした。

五　原文中斜字体（イタリック）または隔字体（ゲシュペルト）になっている個所は、訳文ではゴチック活字または傍点をつけて標示した。

六　地名、人名はなるべく現地の発音にちかく表記することを原則としたが、從來の慣用をも考慮した。

七　手紙は主題に関係ある部分の抄訳にとどめ、文調も手紙であることに格別の考慮をはらってはいない。

八　本選集の訳文は、それぞれの訳者が担当し、校訂者によって原典と各國語訳とを逐語的に参照し、内容上と用語用字上との校訂がなされ、文調にも一應の統一がはかられたうえ、なったものである。

目次　第一卷

新世界観の成立

現象論のヘーゲル的構成（マルクス）……一
市民社会と共産主義革命（マルクス）……三
フォイエルバッハについて（マルクス）……五
フォイエルバッハ――『ドイツ・イデオロギー』第一部（マルクス）……一〇
〔A〕イデオロギー一般、ことにドイツの……一一
〔B〕イデオロギーの現実的基礎……五六
〔C〕共産主義――交通形態自体の生産……八五
政治的自由主義――『ドイツ・イデオロギー』第三部（マルクス）……九七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

初期の共産主義的宣傳活動

ロンドンにおける諸國民の祝祭（エンゲルス）……一二五
ドイツの狀態（エンゲルス）……一四一

共産主義通信委員会

マルクスからブルードンへ（一八四六年五月五日）……一七一
ヘルマン・クリーゲの編集する
『フォルクストリブーン』（マルクス＝エンゲルス）……一七三
在ブリュッセル・ドイツ民主的共産主義者から
ファーガス・オコンナーへの挨拶（マルクス＝エンゲルス）……二〇〇
ブリュッセルの共産主義通信委員会への通信（エンゲルス）……二〇四
ドイツのスタトゥス・クオ（エンゲルス）……二二八
プロシャ憲法（エンゲルス）……二五四

プルードン主義との闘争

マルクスからアネンコフへ（一八四六年十二月二十八日）……二六三
哲学の貧困（マルクス）
はしがき……二六八
第一章　科学上の一発見……二六九
第一節　使用価値と交換価値との対立……二六九
第二節　構成された価値または綜合価値……二八六
第三節　価値比例性の法則の適用……三三三
A　貨　　幣……三三三
B　労働の剰余……三四六
第二章　経済学の形而上学……三六一
第一節　方　　法……三六一

第二節　分業と機械……三九一
第三節　競争と独占……四一一
第四節　所有〔土地所有〕または地代……四二五
第五節　同盟罷業と労働者の團結……四四〇
ドイツ語第一版への序文（エンゲルス）……四五九
ドイツ語第二版への序文（エンゲルス）……四八二
附　スペイン語版についてエンゲルスからホセ・メサへ……四八三

新世界観の成立

現象論のヘーゲル的構成（マルクス）

（一）人間のかわりに自己意識。主観――客観。

（二）諸事物の諸区別（Unterschiede）は重要ではない。というのは、実体が自己区別（Selbstunterscheidung）として、あるいは自己区別が、区別するはたらき（das Unterscheiden）が、悟性の活動が、本質的なものとして把握されるから。したがって、ヘーゲルは、思弁の内部で、現実的な、事物を把握する諸差別（Distinktionen）をあたえたのである。

（三）疎外（Entfremdung）の揚棄が対象性の揚棄と同一視されている（ことにフォイエルバッハによって展開された一側面）。

（四）表象された対象の、意識の対象としての対象の、汝の揚棄が、現実的な対象的な揚棄に、思惟と区別される感性的な行動、実践、実在的な活動と同一視されている。（もっと発展されるべきこと）。

市民社会と共産主義革命（マルクス）

（一）近代國家の成立史、あるいはフランス革命。
政治組織（das politische wesen）のうぬぼれ——古代國家との混同。市民社会にたいする革命家たちの関係。
市民組織と國家組織とへのいっさいの要素の二重化。
（二）人権の宣言と國家の憲法。個人の自由と公的権力。
自由、平等および統一。人民主権。
（三）國家と市民社会。
（四）代議制國家と憲章（Charter）。
立憲代議制國家、民主主義的代議制國家。
（五）諸権力の分立。立法権と執行権。
（六）立法権と立法諸機関。政治諸團体。
（七）執行権。中央集権と位階制（ヒエラルキー）。中央集権と政治的文明。連邦制度と産業組織。國家行政と自治体行政。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

（八ノ一）　裁判權と法。
（八ノ二）　民族性と人民。
（九ノ一）　諸政党。
（九ノ二）　選挙權、國家と市民社会との廃棄のための闘爭。

フォイエルバッハについて（マルクス）

一

従來のいっさいの唯物論（フォイエルバッハのも算入して）の主要な欠陥は、対象、現実、感性が、ただ客体または直観の形式のもとでだけとらえられ、感性的な人間的な活動、実践としてとらえられず、主体的にとらえられないことである。したがって活動の方面は、抽象的に、唯物論とは反対に、観念論――これはもちろん現実的な感性的な活動そのものを知ってはいない――によって発展させられた。フォイエルバッハは、感性的な――思惟的客体から現実的に区別されている客体をとらえようとしているが、しかし彼は人間的活動そのものを対象的活動としてはとらえていない。そこで、彼は『キリスト教の本質』のなかで理論的態度だけを眞に人間的なものとみて、これにたいし、実践はそのけがらわしいユダヤ人的な現象形態においてだけとらえられ、それに固定されている。したがって、彼は「革命的な」、「実践的＝批判的な」活動の意義を理解しないのである。

二

対象的眞理が人間の思惟にたっするかどうかという問題は、なんら理論の問題ではなく、一つの実践的な問題である。実践において、人間は眞理を、すなわち彼の思惟の現実性と力とを、その此岸性を、実証しなければならない。実践から遊離された思惟が現実的であるかまたは非現実的であるか、というあらそいは、純然たるスコラ的な問題である。

三

環境の変更と教育とにかんする唯物論的学説は、環境が人間によって変更されなければならず、教育者自身が教育されなければならないということを、わすれている。したがって、この学説は社会を二つの部分――そのうちの一方は社会のうえに超越する――にわけなければならなくなる。

環境の変化と人間的活動あるいは自己変更との合致は、革命的実践としてだけとらえられ、そして合理的に理解されることができる。

四

フォイエルバッハは、宗教的自己疎外の事実から、すなわち宗教的世界と世俗的世界とへの世界の二重化という事実から、出発する。彼の仕事は、宗教的世界をそれの世俗的基礎に解消させるところにある。しかし、世俗

的基礎がひとりでにうきあがって、一つの独立王國として雲間に定着するのは、この世俗的基礎の自己分裂と自己矛盾とからだけ説明されるべきである。それゆえに、この世俗的基礎そのものがそれ自身において、まずその矛盾において理解されなければならないとともに、さらに、実践的に革命されなければならない。それゆえに、たとえば、神聖家族の祕密のもとが地上の家族にあることが発見されたうえは、今度は地上の家族そのものが理論的に、また実践的になくされなければならないのである。

五

フォイエルバッハは、抽象的思惟では満足せず、直観を欲する。しかし、彼は、感性を実践的な、人間的・感性的な活動としてとらえていない。

六

フォイエルバッハは宗教的本質を人間的本質に解消させる。しかし、人間的本質はけっして個々の個人に内在する抽象体ではないのである。人間的本質は、その現実においては、社会的諸関係の総和である。

フォイエルバッハは、この現実的本質の批判にたちいらないので、それでやむなく、

(一)　歴史的経過を捨象して、宗教的感情をそれだけのものとして固定し、そして、抽象的な——孤立させられた——人間的個体を前提しなければならない。

(二)　したがって、本質はただ「類」として、内的な、ものいわぬ、多数の個人を自然的に結合する普遍性と

して、とらえられうるだけである。

七

したがって、フォイエルバッハは、「宗教的心情」そのものが一つの社会的産物であるということ、また、彼の分析する抽象的個人が一定の社会形態にぞくしているということを、みない。

八

いっさいの社会的生活は、本質上実践的である。理論を神秘主義へいざなうすべての神秘は、その合理的な解決を、人間の実践とこの実践の把握とのうちにみいだす。

九

直観的唯物論、すなわち感性を実践的活動としてとらえない唯物論が、到達するところの最高のことは、個々の個人と市民社会との直観である。

一〇

ふるい唯物論の立場は市民社会であり、あたらしいそれの立場は人間社会または社会的人間である。

一一

哲学者たちは世界をいろいろに解釈してきただけである。かんじんなことは、それを変更することである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com